

---

# 機動武闘伝IS

TAKA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動武闘伝G

### 【Zコード】

Z6517U

### 【作者名】

TAKA

### 【あらすじ】

第1-3回 ガンダムファイトを制したドモン・カッシュ。  
しかし、彼は更なる高みを目指していた。  
そんな時訪れる突然の事件。  
それは彼を新たな戦いへと誘うことになるのであった。

見ての通りのISとGガンダムのクロス小説です  
作者はISはアニメ版の知識しかありません

## プロローグ（前書き）

もうなんだか時期遅れ感は否めませんが、どうかお付き合いください  
基本的にドモンはフラグを立てない方針で行こうと思っています  
どうぞお付き合いください

## プロローグ

ギアナ高地

「ふつ！はつ！」

ドモンは更なる高みを目指して修行に明け暮れていた。

デビルガンダムとの死闘から早一年。シャツフル同盟のキング・オブ・ハートとしてガンダムファイトを戦い抜き、師匠であった東方不敗を倒し、宿敵デビルガンダムを倒して尚、ドモンは強さを求める続けていた。

（まだだ、この程度ではまだ師匠を超えたとは言えない・・・！）確かにドモンは東方不敗を倒した。しかし、そのとき東方不敗の体は不治の病に侵され、全力で戦うことはできなかつた。

「くつ、こんな迷いのある拳では修行など意味が無い・・・」

ドモンがねぐらに戻るつとすると、急に辺りに霧が出始めた。

（何故急に霧が・・・）

今まで長いことここで修行してきたが、朝以外で霧が出たことなど一度もなかつた。

何者かが霧を発生させたのかと疑つたが、今の状況でわかることなど一つもなかつた。

とりあえず記憶だけを頼りにねぐらへと向かつて進むことにした。それにしても濃い霧である。一寸先すら見ることはかなわない。しばらく進むと霧が晴れた。しかし、そこはジャングルではなく何処かの海岸なのであつた。

## 第一話 所在不明！？迷い込んだファイター

「「」はいったい・・・

ドモンが今までいたジャングルなどどこにも存在しない。

そのとき、ドモンは右手首に違和感を感じた。

（これは、腕飾り・・・キング・オブ・ハートの紋章が彫られているな・・・）

だが、ドモンにはこのようなものをつけていた覚えはない。

（全く持つて不思議だ。）（）は情報収集を何とか行わなければ・・・

「「」にいるのは誰だ。」

「・・・」

振り向くとそこには黒髪の女性が立っていた。

「貴様は何者だ？名を名乗れ。」

「「」いう時はそちらから名乗る物じゃないのか？」

「生憎不審者に名乗る名前は持ち合わせていない。」

「・・・」

ドモンは隙を見て逃げる算段をしていたが、どうもこの女性には隙が見られない。

仕方がないので抵抗をあきらめ、この女性から情報を得る方に転換することにした。

「・・・俺はドモン・カッシュだ。教えてくれ、「」はどうだ。」

「「」はIFS学園。インフィニット・ストラトスの操縦者の養成学校だ。貴様はそんなことも知らずにここに侵入したのか？」

ドモン「インフィニット・ストラトス？何だそれは。」

「・・・貴様、それは本気で・・・」

女性は一瞬信じられないという表情をした後ドモンの顔をまじまじと見た。

「・・・どうやら冗談を言っているわけではなさそうだ。貴様、ど

「から来た？」

「出身はネオジャパン、直前までいたのはギアナ高地だ。」

「・・・」

「織斑先生！」

「そこでもう一人、今度は童顔の女性が現れた。この人の発言を聞く  
とどうやら一人は先生であるらしい。」

「山田先生か。」

「不審者は確保しましたか？」

「いや、そこにいる。」

「・・・」

「どうして拘束していいんですか？」

「どうやら訳ありのようだ。ISのことを知らなかつた上に出身も  
はつきりしない。」

「・・・俺は先程ネオジャパン出身といつたはずだがな。」

「ネオジャパン？なんですかそれは？」

「・・・なんだと？」

人々が宇宙<sup>そら</sup>で暮らすようになつてから長い月日が経つた。それな  
にコロニーの、ましてや前回のガンダムファイトの優勝国であるネ  
オジャパンを知らないというのは明らかにおかしい。  
(まさか、ここは異世界だとでもいうのか・・・?)

3人はIS学園の校舎に向けて移動していた。千冬がここで話して  
いてもらちが明かないと判断したからである。

道すがらドモンは一通りISとこの世界について説明を受けた。本  
來女性しか操縦できないこと、片手程しか男性操縦者がいないこと、  
その結果極端な女尊男卑がはびこつていてのこと・・・。  
ドモンも自分のいた世界のことを説明した。コロニーのこと、モビ  
ルファイターのこと、4年に一度行われるガンダムファイトのこと・  
・・。

ただ、自分が何者であるだけは明かさなかつた。

「・・・にわかには信じがたい話だな。」

「ひからも信じられん。モビルファイターと同等の性能を持つパワードスースがあるとはな。」

「さあ、ここに入れ。」

そこは薄暗くかなり広く感じる部屋だった。

「さて、先程大まかにそちらの世界の説明は受けたが、もっと詳しく話してもらおうか。」

「話すべきことはすべて話したと思うがな。」

「お前が誰なのかはまだ聞いていないと思うがな。」

「・・・」

「・・・男性でE.Sを扱える人間は四人いるのだがな、そのうちの三人に共通することがある。」

「・・・なんだ？」

「出身地が曖昧で、戦いに關して一つ他の追随を許さない分野があることだ。・・・お前もそれなりに格闘技はできるのだろう？」

「!?!？」

「体つきを見れば大体わかる。それにその腕飾り、おそらくはE.Sだ。」

「なんだと!?!？」

「確かにそうかもしだせんね。」

「ドモン・カツシユ、試しに装着してみる。装着するときは念じるようにするんだ。」

ドモンが氣合を込めると体が光に包まれ、装甲が装着された。  
(これは・・・「ゴッドガンダム・・・」)

そのE.Sの見た目は自分の乗機であつた「ゴッドガンダム」に瓜二つであつた。

「やはりE.Sだつたようだな。貴様にはこの4月からE.S学園の生徒となつてもらつ。手続きはこちらで済ませておく。言つておくが拒否権はない。分かったな。」

「どうせ行くあては無い・・・、拒否するつもりはない。」

「よろしく、貴様は私と山田先生のクラスに入ることになる。」「寮に部屋を用意しておきますから今日からそこで生活してくださいね。」

「ああ、分かった。」

「先生には敬語を使わんか馬鹿者。」

千冬はどこからか取り出したファイルのようなもので殴ってきた。

「ぐつ、分かりました・・・。」

「つしてドモンはエリ学園の一年生となつたのだった。」

## 第一話 所在不明！？迷い込んだファイター（後書き）

本当はこれとプロローグで1話だったんですが、なんとなくタイトルがつけにくかったので二つに分けました。  
次回もできる限り早く投稿できるようにしたいです。  
感想お待ちしています

## 第一話 登場！怒りの英國少女（前書き）

さて皆さん

修業していた我らがドモン・カッシュはISの世界に迷い込んでしまいます

この世界に広がる女尊男卑の風潮・・・

そして、その原因たる女性しか動かせないパワードスーツ  
IS・・・

偶然にしてISを手に入れ、世界でも数少ないISを動かせる男となってしまったドモンを待ち受けるものは何なのか  
そして、果たしてドモンは元の世界へと戻れるのでしょうか  
それでは、がんば・・・ISファイト、レディー、ゴー！

## 第一話 登場！怒りの英國少女

「じゃあ自己紹介をして下さいね。出席番号順で。」

ドモンは窓際の席で辟易としていた。

このクラスには自分と対等に試合ができるような気を発しているものが一人もない。

この世界におけるEVAの役割は現在のところは競技用なのだから仕方がないのだろう。

しかも男子は自分を除けば一人しかいない。

人付き合いが得意ではないドモンにとっては、居心地のいい環境とは言えない。

ドモンは教壇のすぐ前の席に座るもう一人の男子生徒の方を見る。（あの千冬とかいう女の弟だと聞いたが、どれほどのものか手合せしたいものだ。）

ちょうど本人が自己紹介をするように真耶から言われているところだった。

「織斑一夏です。よろしくお願ひします。」

その瞬間、女子生徒全員の目が獲物を狩るうとする獣のような目へと変わる。

ドモンも一応は集中して聴いていた。

（そこまで男性が珍しいのか？）

自分のこれから的生活が少々不安となつてくるドモンであった。一夏は相当追いつめられた様子だったが、意を決して発言した。

「以上です！」

その瞬間ドモンを除く全員がずつこけた。

そして、一夏の頭に鉄拳が落とされた。

そこにはいつの間に入ってきたのだろうか、千冬が立っていた。

「げつ、千冬姉！？」

一夏の頭にもう一撃鉄拳が落とされた。

「学校では織斑先生だ。」

その様子を見てドモンは感心する。

（あの一撃、こちらの世界について、武術の稽古を積めばかなり上位の、あるいはシャツフル同盟に匹敵するMFになれたやも知れんな。）

ドモンは千冬がこちらにおける最高クラスのエリ操縦者であることをまだ知らない。

その後は淡々と自己紹介が進んでいく。一人やたら偉そうのがいた気がするが気にしないことにする。

（ここには師匠のような武術の達人はいるのだろうか？ いるとすればぜひ手合せ願いたいところだが・・・）

「・・・シユ君。」

（だが、この中で期待できるものはいるまい・・・。そうなると上級生の中から探すべきか？）

「カツシユ君！」

「ん？」

「自己紹介カツシユ君の番なんだけど・・・。」

「ああ、はい。」

どうやら考え方をしている間に自分の番が回ってきたようだ。

「俺はドモン・カツシユだ・・・」

周りからは一夏の時のように好奇の視線が飛んでくる。そこでドモンは先人の戦法を借りることにする。

「以上だ！！」

再びほぼ全員がこけた。千冬からは鋭い殺気が飛んできたので、負けじとさつきを送り返すと、周りの女生徒数名が身震いをした。その数名はこの先期待ができるそうだなどドモンは思った。

なんやかんやで自己紹介が終わつた。

ここで、千冬が教壇に立つた。

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物にする

のが仕事だ。」

その瞬間教室全体から悲鳴が上がった。

（どうやらかなりの有名人のようだな。今の反応を見るとこの人に会うために来ている奴らもいるのだろう・・・。そうなると、この学年だけではなく、上級生もあまり期待できないかもしかんな・・・。）

早速授業が始まった。内容はEVSの基礎だったが、ドモンは全くチンパンカンパンだった。

（拙い、全くわからん。どうすればいいのだ。）

一夏の方も全くわからないようで、全部わからないと発言してまた鉄拳制裁を食らっていた。

この後授業は何とか進んでいき、休み時間になつた。

ドモンが教室のドアから覗いている女子たちに辟易としている、「なあ、ちょっといいか？」

「む？ ああ、織斑か。」

一夏から話しかけてきた。

「俺は、織斑一夏だ。一夏でいいぜ。よろしくな。」

「こちらこそよろしく頼む。俺もドモンで構わない。」

「よろしくな、ドモン。しつかし、ここまで注目されるとはな。」

「しょうがないだろう。世界的にも珍しいEVSを動かせる男子生徒だ。注目しない方が無理だろう。」

「ドモンがいて助かつたぜ。一人だと思つたらそれだけでゾッとするよ。」

「ああ、全くだな。」

一人とも自分一人で女子生徒たちの中で生活する様子を想像して苦笑する。

そのとき、1人の女生徒が近づいてきた。自己紹介の時にやたら偉そうだった奴だと思いだす。

「あなた達、ちょっとよろしくですこと?」

「ん?」

「誰だ?」

「まあ、私のことを存じありませんの!?」この私、イギリスの代表候補生にして、入試主席のセシリ亞・オルコットを!?」

「「すまない・・・」」

その強い語氣に2人は反射的に謝罪してしまつ。

「なあ、一つだけ質問していいか?」

一夏が軽く手を挙げて発言する。

「ふん、下々の者達の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ。」

「・・・代表候補生ってなんだ?」

生徒たちがまたしてもずつこけた。なぜそんなことになるのか分からぬのはドモンと一夏だけである。

「そんなことも知りませんの!? 代表候補生というのは各国のIIS操縦者の中から選ばれたいわばエリートですよ!?」

(ガンダムファイターの一歩手前の奴らみたいなものか。)

「で、その代表候補生が俺達に何の用だ?」

「私の本国でも男性のIIS操縦者は私の先生位しかいませんの。それが、この学園には1人もいるのであれば、少しは仲良くしておいた方が得というもの・・・私は優しくて優秀ですから、泣いて頼めば少しは操縦などを教えて差し上げてもよくつてよ。」

「ああ、ならそのうち頼むよ。」

「そうか、ならよろしく頼む。」

「・・・馬鹿にしていますの?」

そこでチャイムが鳴り、セシリ亞は自分の席に戻つていった。

その日の授業が終わり、ドモンは自分の部屋に戻つてきた。新学期前にここを使うようにといわれた部屋で、現状2人部屋を1人で使つているところだ。

「おう、ドモン。」

声のする方を見ると、そこには一夏が立っている。

「一夏か。お前の部屋はそこなのか？」

「ああ。部屋が隣なら毎朝飯を一緒に食えるな。」

「そうだな。それより、お前は部屋の準備もあるだろ。やるなら早く済ませた方がいいぞ。」

「ああ、じゃあな。」

2人は軽く話してそれぞれの部屋に入った。

一夏がシャワーを浴びていた篠ノ之箒に出くわして死にかけたのはその直後のことである。

翌日、HRの時間である。

「これからクラス代表を決める。クラス代表は主に学級委員のような仕事をしてもらうことになるが来月に行われるクラス対抗戦の代表も兼ねている。自薦他薦は問わん。誰か意見のある者はいるか？」千冬が話し終えた直後、女生徒の一人が手を擧げる。

「はい、私は織斑君がいいと思います。」

「えつ、ちょっと！？」

「私はカツシユ君がいいと思います。」

「おい、待て。俺は」

「納得がいきませんわ！」

クラス代表に推薦されて2人がうろたえていると、不満を露にセシリアが立ち上がる。

「どうして私ではなく、この男達を代表に選びますの！？男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！」

「なつ・・・・！？」

「・・・・」

「セシリ亞さん、ちょっと言い過ぎなんじゃ・・・。」

女生徒の一人が制止するものの怒りに燃えるセシリ亞あの罵倒は止まらない。

「大体、文化的に後進的な国で暮らさなければならること自体私には耐え難い苦痛で・・・」

「そういうイギリスだつて大したお国自慢無いだろ?世界一まずい料理で何年連続覇者だよ。」

「あなた、私の祖国を侮辱しますの!~日本にだつて大したお国自慢はないでしょ!~?」

2人がお互いの祖国を侮辱し合つていると、ドモンが静かに立ち上がりつた。

「・・・そこまでいうなら、1対1で決着をつけたらどうだ?」

「そうですわね。ここまで祖国を馬鹿にされでは腹の虫がおさまりませんわ。」

「ああ、俺も構わないぜ。さすがにここで引き下がるわけにはいかないからな。」

2人がその言葉に同意する。

「言つておくが、俺も参戦するぞ。自分の祖国を馬鹿にされているのは俺も同じだからな。」

ドモンがガンダムファイトに参加していたのは愛国心のためではなく、あるものを探すためで仕方なくだつたが、だからといって自分の祖国に対する思いが弱い訳では無いのだ。

「話はまとまつたな。」

その様子を見て千冬が提案を始めた。

「試合は来週の月曜、第3アリーナで行つ。各自準備をしておけ。分かつたな?」

「はい!」「ああ!」「おう!」

こつしてどちらかというとクラス代表のためではなく、自分たちの祖国の誇りをかけた戦いの火ぶたが切つて落とされようとしていた。

## 第一話 登場！怒りの英國少女（後書き）

気が付いたらかなり長くなつてしましました。

まとめる力がないからでしょかね・・・

ところで前回ドモンハーレムにはしないようにすると言いましたが、話の都合上一人はドモンに惚れてしまします。

それが誰なのかは言えませんが、なんだか手のひらを返したようですみません。

1人だけですから。ええ、一人だけですとも。

それ以上はドモンにはなびきません。

それでは感想、意見お待ちしております

## 第三話 特訓！負けられない戦いへと（前書き）

さて、みなさん。

前回イギリスの代表候補生セシリア・オルコットとの試合を申し込んだ我らがドモン・カツシユ。

しかし、あくまで彼はISに関しては素人・・・。

そこで彼は自分と同じくセシリアと対決する織斑一夏と共に特訓することにしたのですが・・・

それでは、ISファイト、レディー、ゴー！

## 第三話 特訓！負けられない戦いへと

その日の放課後ドモンは作戦会議のため一夏の部屋に向かった。

「一夏、篠ノ之、入るぞ。」

「おひ、ドモン、入つてくれ。」

中に入ると一夏と篠がベッドに座つていた。

「じゃあ、早速会議を始めるか。」

「ああ。とはいっても作戦を立てる前に俺達はHの操縦から学ばなければならぬだろ。」

「まあ、そうだな。向こうは代表候補つてことは相当Hの扱いには慣れてるはずだからな。」

「では、誰かにコーチについてもらつて一人で特訓とこうことでどうだ？」

「それでいいんじゃないか？じゃあ、コーチを探さないとな。」

「それについてだが・・・」

「ちょっと待つてくれないか。」

ここで今まで黙つていた篠が発言した。

「なんだ、篠？」

「一夏のコーチは私に任せてくれないか？」

「それは構わんが、どうするんだ？篠ノ之もHの操縦経験がある訳では無いんだろう？」

「こいつにはHのHのHの前に戦つ覚悟が足りない。それを私が特訓して鍛えなおしてやる。」

「ほう・・・、分かった。では、一夏は條ノ之に任せて俺は俺でコーチを探すことにしよう。それでいいか？」

「ああ、1週間後に互いの成果を出せるよう頑張ろつぜ。」

「では、俺はコーチを探すから今日は戻るといよ。じゃあ、また明日会おひ。」

「おひ、じゃあ第1回は早速特訓を始めよつぜー。」

「では、早速剣道場へ行くぞ！」

「なつ、鍛えなおすつて剣道でかよ！？」

「問答無用！さつさと行くぞ！」

「待つてくれ！ちゃんと歩けるから、引きずりないでくれ！」

部屋を出ると一夏と篝はさつさと剣道場へ行つてしまつた。  
(さて、俺も早いところコーチを見つけなければな。とりあえず織斑先生に頼んでみるか・・・)

「だめだ。」

教務室に入つてすぐに千冬を見つけたもののコーチの話を持ちかけ  
ると一瞬で断られてしまつた。

「どうしてですか。」

「生憎私は一人の生徒のために時間がさけるほど暇じやない。他を  
あたつてくれ。」

「・・・分かりました。」

「あれ、カツシユ君、どうしました？」

ドモンが他のコーチをやつてくれそうな人を探そうと踵を返そうと  
すると、ちょうどそこに真耶がやつてきた。

「ああ、山田先生、ちょうどいいところに来てくれた。」

「どうしました、織斑先生？」

「カツシユがISの操縦を教えてもらいたいと言つてきたのでな。  
山田先生、やつてもらえるか？」

「ええ、私は構いませんよ。」

「そういう訳だ。カツシユ、今度から山田先生がお前のコーチだ。  
しっかり基礎をたたき込んでもらえ。」

「よろしくお願ひします、山田先生。」

「はい、よろしくね、カツシユ君。でも今日は生憎仕事があるから  
訓練は明日からね。」

「分かりました。あつ、それと織斑先生。」

「何だ？」

「ここの近くの林を個人的に使つてもいいでしょうか?」

「構わんが、何をするつもりだ?」

「朝の鍛錬に使うつもりなのですが。」

「それなら別に許可などいらん。なぜわざわざ言う必要がある?」

「力加減を間違えると木を折つてしまつかもしれないの。」

「・・・まあ、なるべく折らないようにな。」

「はい、分かりました。」

「えーと、カツシユ君、今日は図書館に行つてみたらどうかな?色々な資料が揃つてますから。」

「分かりました。では、失礼します。」

ドモンは図書室に向かうことにした。後ろでは千冬と真耶が呆気にとられていた。

ドモンはあつさりと木を折れるといった。彼にとつては特別なことではないのかもしれないが、一般的には気を素手で折るなどもはや人間業ではない。

2人はドモンの力の片鱗を言葉の一端から知ることとなつた。

(ここか)

それから数分後、ドモンは図書室にたどり着いた。

中に入ると人はまばらで、本を読む人間よりもどちらかといつと静かな自習室として利用している人が多いように感じられた。司書にIS関係の資料の場所を聞き、その中から良さそうなものを数冊抜き出し、読むことにした。

1年ほど前に書かれた本を読んでいると男性IS操縦者についての項が見つかった。

(ここは一応しつかりと読んでみるか)

男性IS操縦者は世界でも現在のところ4名しか存在しない。その希少性から男性IS操縦者を有する国は国内に男性IS操縦者が存在することを明らかにしながらも、詳細な情報については公開して

いない。

男性IS操縦者の存在する国は、中国、ドイツ、イギリス、日本の4か国のみである。

ただし、日本に関しては操縦者が失踪しているという情報もあり、現在はどうなっているのかは定かではない。

残りの三名について、いずれも高い戦闘能力を持つと言われているが、各國政府は訓練教官として活動していると発表しており、今後も国際大会などに出席することはないと思われる。

いずれの人物も突然現れたことから一部では「異世界から現れた」といったオカルトな噂もまことしやかに囁かれている。

（他にも俺のような奴がいるのだな・・・）

ドモンはこの本も含め数冊を借りて部屋に戻ることにした。部屋に戻つてくるとちょうど一夏と篝が戻つてくるところだった。ただ、一夏は篝に引きずられており、体には全く力が入っていなかった。

ドモンはどのような特訓が行われたのか想像して一夏の明日からの毎日が平穀に過ぎることを祈るのだった。

翌日からは真耶による特訓が始まった。

真耶もかつては代表候補生だつたらしく、的確な指導によつて最初は動くのも一苦労だつたドモンも試合前日にはかなり動けるようになつていた。

「しかし、変わつた機体ですね。格闘武器しか積んでいないなんて。

「ガンダムファイトは要はガンダムを使つた格闘技ですし、俺には格闘しかできませんから。」

「でも、銃火器を使つてもいいんでしょうか？その方が有利だと思つんだけどなあ。」

「だから俺が戦つた大会の前は射撃主体の機体が多かつたんですよ。

「じゃあ、どうしてこの機体はこうこう風になった？」

「それは俺の師匠が前回大会で優勝したからです。」

「?.どうしたこと?」

「前回大会では優勝候補は狙撃を得意とするジョントル・チャップマンでした。彼は3連覇を達成していて、その大会でも優勝するだろ?と言わっていました。しかし、俺の師匠が格闘機で優勝したために、格闘主体の機体が一気に増えたんです。」

「なるほど、そういうことだったの。」

「ところで俺の操縦はどうですか?」

「うん、だいぶ良くなってきたと思つ。特に格闘はいいと思つよ。オルコットさんの機体は射撃戦が主体だから、近接戦闘に持ち込めば勝てるかもしれない。」

「今まで訓練に付き合つてくださいありがとうございました。」

「どういたしまして。」

(明日はこよいオルコットとの試合だ・・・)

ここで勝てれば更なる強者と当たる機会も増えるだろう。しかし、負ければあのセシリ亞のことだ。あのお嬢様口調で思いつきり罵倒していくことだろう。

しかし、一番嫌なのは自分の祖国の尊厳が傷つくことである。

国の誇りにかけても自分は負けるわけにはいかないのだ。

(今の俺にどこまでできるか分からん・・・。だが、できる限りのことをしよう)

そして、ドモンは眠りについた。

ついに勝負の朝を迎えるのであった。

おまけ

俺、織斑一夏は最近寡の特訓で体がボドボ・・・もといボロボロだった。

ここ3日意識があつた状態で部屋に帰つていない。

ただ、その日筈は用事があるとかで「今日は特訓はなしだ。」といつてどこかへ行つてしまつた。

そこでいつもより早く帰ることができた。

「ん・・・？」

部屋に戻るとちゅうじドモンが部屋から出て行つた。

ドモンが山田先生から訓練を受けていると聞いていたが、今日は職員会議があると言つていたので訓練ではないのだろう。

ではどこにいくのか。

ここで「どこ行くんだ?」と聞くこともできるが、ここで俺は後をつけることにした。

ちょっと早足で進むドモンを追つとあいづは近くの林に入つていつた。

木の陰から見てみると、ドモンはその場に座つて瞑想を始めた。それを十分ほどすると、今度は木に手を当ててブツブツと何かを呟いている。

そうしたら今度は正拳突きを始めた。

毎日こいつやって鍛えているのだろうか。

すると、今度は手を止めて気合を込めるような体勢をとつた。

「はあああああああ、ふんっ！」

強く正拳突きを放つと、なんと割合太く見えた木があつさりと折れてしまつた。

「むう、力加減を間違つたか・・・。」

こつちに聞こえる声で言つてるな。もしかして氣づかれてたか?

とりあえず、木が折れたのは見なかつたことにじよつ・・・。

## 第三話 特訓！負けられない戦いへと（後書き）

思つていたよりも早く完成しました。

一回思いつけばこんな早さで投稿できるのですが、脳が「興が乗らん！」といえばいつまでも迷い続けます。

次回は現時点での機体設定を書こうかな

それでは意見・感想お待ちしています

## 機体設定 順次更新につきネタバレ注意（前書き）

ここでは「本編」には出てこない機体設定について書いていきます  
要するにオリジナル機の設定メモです

## 機体設定 順次更新につきネタバレ注意

ゴッドガンダム（IS）

使用者 ドモン・カツシュ

武装 ゴッドスラッシュ × 2

バルカン × 2

ワンオファビリティ ???

ゴッドガンダムという名前はもちろん以前の乗機からのものであるが、技はシャイニングガンダムとゴッドガンダム両方のものが使える。

ただし、シャイニングショットは使用不可なので射撃武器は実質無いに等しい。（バルカンは牽制程度にしかならないため）

真耶が言っていたように格闘に特化し、ほとんど武装を持たないかなり変わった機体である。

外見はほぼそのままゴッドガンダムで、違うのは頭部が生身であるということだけである。（イメージ的には東方不敗との最終決戦での石破天驚拳の撃ち合い前にハイパーモードになつて顔の部分だけドモンになつた状態に近い）

武装が少ないことはドモンの技で補う形になる。

また、武装が少ないので一夏の白式同様ワンオファビリティに容量が割かれているのが理由であるが、そのワンオファビリティは現在のところ不明である。

赤龍

使用者 凰鈴音

武装 青龍偃月刀 × 1

ドラゴンクロール「龍爪甲」 × 2

拡散ビーム砲「雷炮」 × 2

中国が開発していた第3世代ISを元に、東方不敗のアドバイスで

更なる改良を加えたE.S。

東方不敗の影響で格闘よりな機体になつてゐるが、龍爪甲と雷砲により中距離もこなせる割とバランスのいい機体になつてゐる。エネルギー効率は第3世代の中では上位に位置する。

青龍偃月刀は三国時代の英雄関羽が使つてゐたとされる伝説の武器をモーデルにしたもので、刃には龍の紋が刻まれてゐる。日本で言う薙刀のような武器であり、格闘武器の中ではトップクラスのリーチを誇る。

龍爪甲は籠手のようすに両腕に装着されており、腕と独立して動かすことが可能であり、ドラゴンガンダムのドラゴンクローよりもどちらかと言えばショーンロンガンダムのドラゴンハングに近い物になつてゐる。

雷砲は近距離で有利な拡散ビーム砲である。龍爪甲の龍の口の中にあり、相手の死角から攻撃することも可能な武装であるが、これを自由に扱つにはある程度の慣れが必要なので兵器には向かない。ビームの収束率はある程度は調節できるので、中距離くらいなら対応は可能である。

## 機体設定 順次更新につきネタバレ注意（後書き）

ゴッドガンダムのワントオフアビリティはもうバレバレですね  
ただ、Gガンダムを見てない人もいると思うので一応伏せておきます  
まあ、結構すぐ出てきてしまいますが、気にしない

赤龍は散々ネーミングに苦労させられました。  
結果的に武装名は多分漢字から意味は読み取れても中国語からすれば相当おかしな言葉だと思います  
個人的にはドラゴンクローバーは大好きです

## 第四話 決闘—セシリヤ・ドモン（前書き）

さて、皆さん。

ついに決闘の朝を迎えた我らがドモン・カツシユ。

そして、ドモンとは別に厳しい特訓を乗り越えた織斑一夏。彼らは確実に力をつけて今日という日に臨みます。

今回の相手はイギリス代表候補生セシリヤ・オルコット！

射撃戦が得意な彼女に彼らはどうやって挑むのか。

果たして彼らはその手に勝利をつかむことができるのでしょうか。

それでは、ISファイト、レディ、ゴー！

一夏の戦闘部分は割愛 だってドモンが主人公ですから

## 第四話 決闘！セシリアルモン

「ドモン、おはよ！」

「一夏か。いよいよ今日だな。」

「ああ、特訓の成果見せてやるう・・・と言いたいんだが・・・」

「ん？どうした？特訓をさぼっていたわけじゃないんだろ？？」

実際ドモンはほぼ毎日ボロボロになつて帰つてくる一夏を叩撃している。

その様子から筈からつけられた稽古はかなりのものだと分析していた。

「実は、筈から受けたのつて剣術の稽古ばかりでさ。結局ISの操縦とかは全然教えてもらえなかつたんだ。」

「そうなると、今日の勝負は大丈夫か？」

「まあ、おかげで剣術の動きとかは大体思い出せたからそれで何とかして見せるや。それに」

「？」

「この期に及んで逃げたなんてことになつたら男がすたるしな。俺は逃げないぜ。」

「フツ、いい覚悟だ。だが、訓練を受けていないのは少々どうか大分分が悪いと思うぞ。」

「・・・だよなー。」

放課後、第3アリーナにはすでにそれなりの人気が集まつていた。1年生だけではない。数少ない男性IS操縦者と代表候補生が戦うとあつて注目度は高いようだ。

「筈、何でおれにISの訓練してくれなかつたんだよ。」

「つるさい！この期に及んで文句を垂れるな！仕方がないだろ？まだISが届いていなかつたんだから・・・」

「別に量産機を使えばよかつたんじゃないのか？」

「ぐつ・・・」

「一夏、お前はどの工房を使つんだ?」

「量産型の打鉄にしようかな。俺には専用機なんて無いし。」

「あるぞ。』

「千冬姉!?」

『織斑先生と呼べ。』

『これが織斑君の専用機、『白弔』です。』

真耶がそういうと同時に後ろのハッチが開き中から白弔が姿を現す。

『急ピッチで用意させたものだが出来は悪くない。さっそく動かしてみる。』

「ああ!」

『そうだ、背中を任せのうと乗り込め。時間が無いから戦いの中で満足に動かせるよう』じる。』

『じゃあ、ドモン、ぐつちが先に出る。』

『先に一夏が行つてくれ。俺はしばし氣を整えてから戦いたい。』

『お、おう。じゃあ、先に行かせてもらひだ。』

『い、一夏。』

『どうした、第?』

『私が稽古をつけたんだ。負けるなよ。』

『ああ、分かつてゐさ!』

そしてカタパルトに乗り、一夏は出撃した。

『篠ノ之。』

『どうした、カツシユ?』

『俺はしばし瞑想をする。決着がついたら声をかけてくれ。』

『ああ、分かつた。』

（この勝負一夏は負けるな・・・）

ドモンの予想通り一夏は負けた。だが、ドモンの予想よりも善戦した。これは一夏の才能によるものだらう。

「おい、カッショ。」

「む、けりがついたか？」

「ああ、残念ながら一夏は負けてしまった。試合の後墜落してしまつて今は医務室だ。」

「・・・そうか。」

「だから、頼む！一夏の敵を討つてくれ！」

「ああ、任せろ。」

ドモンは立ち上がり自分の機体である『ゴッドガンダム』を展開する。まだ展開には少々時間がかかるが、真耶には「初心者にしては早い方だ」と言われている。

ドモンはカタパルトに乗り、空へと舞い上がる。

（このよつな出撃の仕方も悪くはないな。）

目の前にはセシリアが立ちはだかる。そこでセシリアから通信が入る。

『先程の方が負けましたのによく出てこられましたわね。』

「俺は逃げはしない。そして、負ける訳にもいかない。祖国の誇り、そして、キング・オブ・ハートの名に懸けてっ！」

『では、あなたにチャンスを差し上げますわ。』

「ほう、何だ？』

『このまま戦つても私が一方的に勝つのは自明の理・・・。今土下座して謝れば少しは加減して差し上げてもよくなつてよ。』

『加減など必要ない。お前がいくら強くてもいつも勝つとは限らん。・・・昔のドイツ人が残した言葉にはこんなものがある。『強い者が勝つのではない、勝つた者が強いのだ。』とな。』

『では、何も変わりませんわね。』

『ゴッドガンダムのモニターに『警告 敵IIS射撃体制に移行』と表示される。』

（・・・来る！）

『私は強く、そしてこの決闘にも勝つのですから！』

セシリアがスタートライトMk-?を構え射撃を行う。しかし、直線

的な攻撃だつたためドモンにあつたりかわされる。

「どうした！貴様の攻撃はその程度か！」

ドモンはかわしながらセシリアへ接近していく。

その時背後から攻撃が飛んでくる。

「ぐおつ！？」

『ふん、このブルー・ティアーズ、みぐびつてもらつては困りますわ！』

（遠隔兵器か！？）

気づくとドモンの周りを4基の砲塔が飛んでいる。

（こ）の程度の数ならつ！）

ドモンの中では遠隔兵器は驚きこすれど、翻弄されて後れを取る物ではない。

自分の盟友であつたジョルジュ・ド・サンドのMFローズガンダムには遠隔兵器であるローゼスピットが搭載されていた。ドモンはその攻撃に何度も苦しめられたが、ローゼスピットの数と比べれば今相手にしているものなど物の数ではない。

周りを飛ぶ砲塔から次々とビームを放つもドモンは最低限の動きだけでかわす。

痺れを切らし少しづつ砲塔を接近させる。

（かかつた！）

ドモンは2本の刀「ゴッドスラッシュ」を抜刀する。

「ゴッドスラッシュ、タイフウウウン！」

『なつ、一瞬で全てのブルー・ティアーズを…？』

「はあああああつ！」

千載一遇の好機と見てドモンはセシリアに對して突進する。

セシリアはそれをスター・ライトMK-?で止めようとするが、それを気にせずドモンは突つ込んでいき、一太刀を浴びせる。

『ああつ！スター・ライトMK-?がつ！』

シールドエネルギーがかなり削られ、さらに武器も奪われセシリアは裸同然の状態になつてしまつた。しかし、ドモンも先程の突進で

3分の2ほどどのシールドエネルギーを失ってしまった。

「これで、ヒドめだああああああああ！」

ヒドめを刺そうと突進するドモン。その時、追い込まれているはずのセシリ亞が笑みを浮かべる。

『かかりましたわね！』

セシリ亞の腰の部分に新たな武装が展開される。

（ミサイル！？）

何とか避けようとするも、勢いを落とすことができず、ドモンはミサイルの直撃を浴び、煙に包まれてしまつた。

『これで私の勝ちですわね！』

しかし、試合終了のブザーは鳴らない。

「お前が、ブルー・ティアーズなら……」

『！？』

「俺は、黄金の指だあああああ！」

煙の中からドモンが現れる。右手にはキング・オブ・ハートの紋章が浮かぶ。

『俺のこの手が光つて唸る！お前を倒せと輝き叫ぶうううう…』

『くつ、このままでは……！』

慌ててセシリ亞は自分に唯一残された武装であるショートブレード「インターフォルマ」を展開する。

「必殺！シャイニング、フインガアアアアアアアアア！」

『は、速いつ！？』

ゴジダガンドムのスピードについていけず、セシリ亞はそのままシンルドを驚撃みにされてしまう。

（さすがに機体には攻撃できんか……だがっ！）

『はああああああ！』

ドモンが力を加える毎にブルー・ティアーズのシールドエネルギーは削られていく。

『私が、負ける！？そんな！？』

『ふんつ！？』

最後に思いきり力を込めるといシールド残量がゼロになり試合終了の  
ブザーが響く。

『試合終了。勝者、ドモン・カツシユ』

アリーナの喧騒からドモンが発進口に戻ると真耶と千冬が出迎えて  
くれた。

「よくやつたな、カツシユ。」

「おめでとう、カツシユ君。少し前まで初心者だったのにここまで  
できるなんてすごいですよ。」

「ありがとうございます。」

「これでお前がクラス代表だ。今度のクラス対抗戦でも勝てるよう  
に努力しておけ。」

こうしてドモンは辛くもセシリ亞・オルコットに勝利した。  
しかし、これはこの世界におけるドモンのファイトの始まりにしか  
過ぎないのであった。

## 第四話 決闘—セシリアムドモン（後書き）

戦闘描写は疲れますね

結構ギリギリで書いた気がします

次は鈴ができます

ただ今、鈴のIISをどうしようか迷っています

甲龍のままにするかそれともオリジナルを考えるか  
理由は師があるので格闘主体になるんじゃないかと考えたから

です

でもそうすると今後少し困ったことに・・・

迷いどころです

どっちがいいか感想の方で言つていただけるとありがたいです  
オリジナルIISについては設定はこちらで何とかしますのでただど  
ちらがいいかだけ書いていただければ結構です  
それでは感想お待ちしております

加筆した部分は書き終えてからしばらくしてから入れるのを忘れて  
いたのを思い出した部分です  
このセリフが無いと物足りない気がします

## 第五話 再会ー師匠と弟子（前書き）

さて皆さん・・・

セシリアとの戦いに見事に勝利した我らがドモン・カッシュ  
この勝利により彼はクラス対抗戦への出場資格を勝ち取りました

そこで彼を待つ戦いとは・・・  
その前に彼は新たなライバル、そしてとある人物と再会を果たすの

ですが

果たしてそれが誰なのか・・・

それでは、ISファイト、レディ、ゴー！

## 第五話 再会！師匠と弟子

ドモンはセシリアに勝つたためクラス代表に就任した。

その時副代表も決めることになったのだが、なぜかセシリアが辞退し、一夏が副代表になつた。

『カツシユ君、クラス代表就任おめでとう！』

「…こういうのはあまり好きではないんだがな。」

現在ドモンは「カツシユ君クラス代表就任 & 織斑君副代表就任記念パーティ」と銘打たれた会に参加している。（クラスの女子たちに無理やり連れてこられた）

「なあ、一つ聞いていいか？」

「何、織斑君？」

「ドモンがクラス代表になつたのは分かるけど、俺は負けたんだろ？ なんで副代表になつてるんだ？」

「それは私が辞退したからですわ。」

一夏の横に座つていたセシリアが立ち上がる。胸に手を当てるのは彼女の喋る時の癖のようだ。

「勝負はあなたの負けでしたけどそれは考えてみれば当然の事。何せ私が相手だつたのですから。」

この一言で一夏はむつとした表情を浮かべたがセシリアは気付かなかつたようでそのまま話を続ける。

「それで大人気なく怒つたことを反省して、一夏さんにクラス副代表をお譲りすることにいたしましたの。」

ドモンは強い者が代表になるべきだと思ったが本人たちが良いようなので何も言わないとこにした。

「はいはーい。新聞部でーす。はいそこの男子代表一人、肩組んで。写真撮るから。」

二人が肩を組んで、新聞部員が写真を撮つた瞬間、周囲にいた女子たちが一斉に集まつてまるで集合写真のようになつてしまつた。

翌日発行された新聞には何もコメントしていないはずなのにクラス代表戦に自信をのぞかせるドモンのコメントが書かれていた。

翌日の朝、ドモンは一人で食堂に来ていた。

一夏も誘おうと思ったがドアをノックしたら返事がなかつたので、おそらく朝から稽古でもしているのだろう。

（朝飯に食べるのはおかしいがチャーハンでも食べるか・・・）

「すまん、チャーハンをくれ。」

「はいよー。」

中で返事をしたのは小柄な少年で、よくよく見てみるとシャツフル

同盟のメンバーであるサイ・サイシーによく似ている。

（まさかこいつもこっちに来ていたのか・・・？）

「なんだい？おいらの顔になんかついてる？」

「いや、知り合いにあまりに似ていたんでな。」

「ふーん。おいら王紅龍ってんだ。すぐにチャーハン作るから待つててよ。」

（しかしこれほどまでに似た人間もいるものなのだな。）

朝食を終え、教室へ。

「いよいよクラス対抗戦だね、ドモン君。」

「ああ、今から楽しみだ。」

「そういえば、2組に今日転校生が来たらしくよ。何でも代表候補生なんだって。」

「この時期に転校していくなんて、私の存在を危ぶんでのことかしら・・・？」

「ははは・・・。」

セシリ亞の自信満々の発言に苦笑いする一夏。その時女子の一人が

「でも、」と切り出す。

「専用機持ちは1組と4組にしかいないから楽勝だよねー。」

「その情報、古いよ！」「

声のした方向を見るとそこにはツインテールの少女が立っていた。

「誰だ・・・、お前は？」

「私は凰鈴音。中国の代表候補生で2組のクラス代表よ！」

「おい、お前は今日転校してきたばかりなのにどうやってクラス代表になつたんだ？」

「そんなの私が強いからに決まつてるじゃない！」

（こいつまさかチコのよつなことをしたんじゃないだろうな・・・）  
ドモンはかつて出会つたネオメキシコのガンダムファイターであつたチコ・ロドリゲスのことを思い出す。

彼は病氣の妹と地球の海のそばで暮らすために違法な手段（本当のところはどうだつたのかは分からないうが）でファイターになり、地球に降下した後には自分に近づいてくるファイターを排除し続けた。最終的に彼はガンダムファイターに負け、ネオメキシコの役人の温情で死んだ扱いにされ、今は妹と暮らしているはずだがどうしているだろうか。

「鈴！？鈴じゃないか！？」

突然一夏が素つ頓狂な声を上げる。

「久しぶりね、一夏。IS学園に入学したのは一コースで知つてたけどまさかこのクラスだつたなんてね。」

「一夏、知り合いか？」

「ああ、俺の幼馴染だよ。」

そのとき、ふしぎなことが起つた。窓際の席に座つていたはずの篝が一瞬にして一夏の背後に回り、首を絞めながら教室を出て行つたのだ。

『一夏、今のことについて詳しく聞かせてもらおうか。』

『いや、もうすぐHR始まるからや、離してくれよ、なあ！？誰か、タスケテ・・・』

教室を沈黙が支配する。

『えーっと、ところでクラス代表つて誰？』

『ああ、俺だ。』

かろうじてドモンと鈴が現実に戻ると今までの沈黙が嘘だつたように教室内に喧騒が戻る。

「そう、だつたらあなたにエスファイトを申し込むわ！」

「その言い方、お前まさかっ！？」

「ふふふ、今度のクラス対抗戦楽しみに『そこに居つたか、鈴よ…』あいたつ！？」

鈴が後ろから叩かれ前かがみになる。そしてドモンにとっては見慣れた人物が立っていた。

「ええい、宣戦布告に行く際は儂にも知らせないと言つたのを覚えておらんのか、この馬鹿弟子があ…」

「あいたた、だからつて後ろから叩くことはないんじや…」

「分からぬことがあつたら体で覚える…これこそが流派東方不敗の神髄ぞ…」

「ううう…」

「し、師匠？」

「む・・・…? ドモン…? 何故お主がここにいるのだ…?」

異世界で再び出会つこととなつた師匠と弟子。

この一人の再会によつてこの世界がどのように動いていくのだろうか…。

## 第五話 再会ー師匠と弟子（後書き）

大変に遅くなりました  
実家に帰った結果非常に書くスピードが落ちました  
自分が書いた文章が家族に読まれるのがいかに恥ずかしいか  
そのことを考えていたらこのよつたことになってしましました  
本当にすみません

鈴の機体ですが考えた結果オリジナルにすることにしました  
機体に関しては次回の更新で・・・といふことで  
次回はできる限り早く更新したいです

感想お待ちしています

## 第六話　闘えドモン！クラス対抗戦開始（前書き）

さて皆さん・・・

このISの世界で亡くなつた師匠東方不敗と再会を果たした我らが  
ドモン・カツシユ・・・

妹弟子となる鳳鈴音とも出会い、ついにクラス対抗戦へと臨みます  
果たして対決はどうなるのでしょうか・・・  
それでは、ISファイト、レディー、ゴー！

## 第六話 鬥えドモン！クラス対抗戦開始

ドモンはHISの世界において再び師匠東方不敗と出会った。しかし、ドモンには目の前の現実がにわかには信じがたかった。それは当然だ。東方不敗は確かに自分の腕の中で息を引き取ったのだから。

「ヌハハハハ、どうしたドモンよ。ハトが豆鉄砲を食らうつたような顔をしておるだ。」

「し、師匠がどうして・・・？あなたはあの時確かに・・・。」「世の中には信じがたいことが起こることもあるものだ。」「ですが、俺にはどうしても信じられませんー。」「喝つ！」

「！？」「

東方不敗の一喝によつて教室が一気に静まり返る。

「流派、東方不敗は！」

「お、王者の風よー！」

「全新！」

「系列！」

「天破侠乱！..」

「見よ！東方は、赤く燃えている！..」

教室にいたAさんは語る。「あの瞬間東の空が赤く染まつて見えた。」

「と。

「今のでよく分かつたはずじゃ。儂以外に東方不敗がいると思つたか、この馬鹿弟子があ！」

「では、本当に師匠なのですねー！」

「ぐどいわ！最初からやつだと言つておるうがー！」

「あ、あのお・・・。」「

「む？」

声の方を向くといつ之間にか千冬と真耶が来ていた

「 もうすぐHR始まるんですが・・・。」

「 おお、これはすまなかつたのう。」

「 ああ、お前らは早く席に着け。鳳とクロス先生は2組に戻つて下さい。」

「 じゃあ、またあとでね。」

「 ドモンよ、またあとで会おうぞ!」

「 人はそそくさと自分たちの教室へ戻つていった。」

「 ところで、織斑と篠ノ之はどこへ行つた?」

「 うちの一人はHRが始まる直前に戻つてきたのだが、帰つてきたときには一夏はなぜか傷だらけになつていた。」

時は放課後。西日の射す屋上に一人の男が立つていた。

「 改めて、久しづりだのつ、ドモンよ。」

「 お久しゅうござこます、師匠!」

「 つむ。しかし、妙なものよ。一度死んだ儂がこのよつこじてお主と会つ」とにならうとはのつ。」

「 師匠、じぢらでも弟子をとつていたのですね。」

「 つむ。鈴は儂がこちらで指導した中では一番の有望株よ。とはいえ流派東方不敗の技を伝えるには至つてはおらんがのつ。」

「 他の男性IIS操縦者に会つたことは?」

「 儂は国外に出ることはあらか外国人との接触も禁じられておつたから、一度も会つたことが無いわ。」

「 そうですか・・・。」

ドモンは男性IIS操縦者はもしや自分と同じように未来世紀から來たのではないかと予想していた。そこに東方不敗がやつてきたこと

によつて自分の予想は間違つてはいないと思い始めたのだ。

だが、まだ確証がある訳では無い。

(とりあえず明日セシリヤにも確認してみるか。)

「 ところで、ドモンよ。」

「 何でしょう、師匠?」

「お主はおそらく鈴と戦うことになるじゃらつ。鈴は強い。お主も油断しておれば負けかねん相手じゃ。それを忘れてはならぬ。」「俺は戦いで油断なんかしませんよ。ここにいるのは強い奴と戦つて己を磨くためなのですから。」

「ヌハハハハ、お主らしげに答えじや。明日の試合は楽しみにしておるぞ。」

「はい。」

翌日、アリーナにはセシリ亞との対決の時とは比にならない人が入っていた。

やはりクラス対抗戦の注目度は高い物なのだろう。さらに、今回の対戦は転校してきたばかりの代表候補生と世界でも珍しい男性I.S操縦者の対決だ。否が応でも注目は高まる。すでに鈴はフイールドに出てこるが、ドモンはまだピットの中だ。（展開にもだいぶ慣れたな・・・ならば）

ドモンは右手を高く上げ、指を鳴らす。

「出るおおおおおー！ ガンダアアアアアム！」

その掛け声と共にドモンのI.Sが展開される。

（やはりこの方が気合が入るな・・・）

「なあ、ドモン、今の掛け声は何なんだ？」

「まあ、気にするな。俺なりの気合の入れ方だと思つてくれ。」

前方のモニターに鈴のI.Sの大まかな説明が表示される。

「名前は赤龍、近接格闘型か・・・」

「私と戦つた時とは勝手が違いましてよ。」

『カツシユ君、準備ができ次第発進してください。』

『儂もこの管制室から見ておるからのつ。』

「よし、出るぞ！」

ドモンはカタパルトで射出され、空へと舞い上がった。

『よつやく来たわね。』

鈴は腕組みをして待機していた。

「師匠の前となれば負けるわけにはいかんからな、念入りに準備させてもらつたぞ。」

『それは私も同じよ。兄弟子とはいえ戦うからには負けないー。』  
鈴が手に武器を展開する。刃に彫られた青龍、鈴の身の丈を超える  
かと思われるような長さの柄。

「青龍偃月刀か・・・、面白いー。」

ドモンも「ゴッドスラッシュ」を抜き構える。

「お前も師匠の弟子ならこいつ時の掛け声は分かつていいだろ? ？」

『ええ、もちろんよ。』

「行くぞ! ガンダムファイトオー!」

『レディーー!』

「『ゴー!』」

アリーナの中央で一人がぶつかり合い、激しいつばぜり合戦になる。  
しかしパワーで勝るドモンが押し切りいつたん離れる。

『この赤龍をただの近接格闘型と思わないことねー。』

赤龍の左腕が伸び、ドモンを捉えようとする。

「ドランクローか! ? だが、そう来なればなあー。」

ドモンはそれを横に大きく動いて回避する。

その時、龍の口が開き、中から拡散したビームが飛び出す。  
(くつ、シールドを削られた・・・まさか、こんなものまである  
とは・・・)

『はああああー!』

「ちいっー。」

すぐそこまで接近してきた鈴が切りかかるが、寸での所で受け止める。

「いじまでやるとは思つてもみなかつたぞ、鈴! 」

『兄弟子に褒められるのは悪い気はしないわねー。』

「だが、俺は負けんぞ！ キング・オブ・ハートの名に懸けてえ！」

鈴の攻撃を払い、武器をしまう。

そして、ドモンは掌を鈴に突き出す。

「勁つ！」

次の瞬間、鈴が吹き飛ばされた。アリーナでは驚愕の声が上がる。パツと見には軽く触られたようにしか見えなかつたからだ。

しかし、ドモンは掌から氣を発することで鈴を吹き飛ばしたのだ。

『ぐつ・・・・・、コントロールがつ！？』

「もらつたああああ！」

ドモンの右の手の甲にキング・オブ・ハートの紋章が浮かぶ。

「俺のこの手が真つ赤に・・・・

しかし、ドモンの必殺技は出る」とはなかつた。

「システム破損！ 何者かの攻撃でバリアが破られました！」

「試合中止！ 総員直ちに避難を開始しろ！」

避難開始と同時に隔壁が閉じられる。

「いつたいどこの誰ですの！？』

「あのバリアを破るとはなかなかやりあるの？』

突然の攻撃によりアリーナ内では火柱が上がつていた。

『敵襲！？』

爆炎の中から現れたのは黒いISHであった。

## 第六話　闘えドモン！クラス対抗戦開始（後書き）

次回はついに「ゴッドガンダムのワントラブル」が発動します  
鈴のオリジナル機のアイデアをくれたリンクドウさんありがとうございました

機体データは近日公開します  
まだ武装名が決まらないんです  
中国語でつけるのが大変なんです

ちなみに名前の赤龍は漢の高祖劉邦の父親だと伝説で言われている  
ものです

それでは感想お待ちしています

## 第七話 発動！怒りのハイパームード 前編（前書き）

さて、皆さん・・・  
クラス対抗戦で自分の妹弟子である鳳鈴音と対峙することとなつた  
我らがドモン・カツシユ・・・  
しかしそこに乱入してきた黒い謎のHISによつてこれからどうなつ  
てしまふのでしょうか  
それでは、HISファイト、レディー、ゴー！

## 第七話 発動！怒りのハイパーモード 前編

爆炎の中から姿を現したのは氣味の悪い黒いI.S.だった。

通常操縦者の顔は出ているが、このI.S.はフルフェイスのヘルメットのように顔があるであろう部分が装甲で覆われており、操縦者の顔を確認することはできない。

『そこのI.S.! どういうつもりか知らないけど戦いに割り込むなんていい度胸してるじゃない!』

鈴が軽く挑発するが、相手から返答はない。

『無視してるの? 本当に何を考えてるの?』

「鈴、こいつどうもおかしい。体から気の流れが感じられない。生きとし生ける全ての物が持つ気の流れ。流派東方不敗は気を中心としているためその流れには敏感である。

しかし目の前のI.S.からはそれが感じられない。つまり相手は生きているものではない。

『つてことは、これは無人機?』

「ああ、死人が操縦していい限界はな。」

『じゃあ、こいつ相手には思いつきりやれるってことね。』

「ああ、そういうことだ・・・来るぞ!」

敵が攻撃態勢に入る。腕の砲塔にエネルギーが集中する。

二人は散開し、攻撃を回避する。

『あのシールドを一撃で打ち抜くほどの威力よ! 当たつたら一溜りもないわ!』

「だが、守つたら負ける! 攻めるぞ!」

『二人とも聞こえますか! ?』

二人が接近戦を仕掛けようとしたところで通信が入る。

『二人とも直ちに避難してください! 今そちらに先生方が向かっていますから!』

『そういう訳にはいきません! まだ避難は完了していないんでしきう

？』

『それどころではない。』

「織斑先生！？』

『ドアが何者かによつてロックされた。現在避難は不可能だ。』

「ならば尚更！』

『私達教師には生徒を守る義務があります。そのＩＳは先生たちで何とかしますから、急いでピット内に避難してください！』

『あの攻撃を見ただろう！？あれではシェルターもバリアも意味が無い！避難完了まで俺たちが時間を稼ぐ！』

『そうね、あれじゃあ逃げても意味が無いわ。だったら私たちが食い止めた方が！』

『・・・分かつた。』

『織斑先生！？』

『ただし、避難が完了するまでだ。完了次第お前たちも退避しろ。』

『『了解！』』

『通信が切れ、二人は再び敵ＩＳに対峙する。ＩＳはまるで一人が通信を終えるのを待つていたかのようだ。』

『さて、どこから攻めるか・・・。』

『最初は様子を伺つた方がいいんじゃないの？』

『ふつ、逃げるのは性に合わないんでな。』

『それでこそ兄弟子つて感じね。』

『まずは接近するぞ！』

『人が突撃すると、敵ＩＳは砲塔を向け攻撃を再開する。』

しかし、ドモンも鈴も小さく回避して突撃のスピードを緩めない。

あつという間に敵ＩＳのそばまで接近し、二人は武器を振りかぶる。

『もうつたああああ！』

『はああああ！』

しかし、二人の腕は振り下ろされなかつた。

敵ＩＳが二人の腕をつかんで止めたのだ。

『くつ、なんてパワーだ！』

『私の攻撃を片腕で止めるなんて…』

「仕方ない、いつたん距離をとるぞ！」

敵IHSから一人は離れたが、IHSは予期しなかつた行動をとつた。シェルターで覆われた観客席に腕を向けたのだ。

「まずいつ！」

咄嗟にドモンは間に入り、ゴッドスラッシュを構える。そこにビームが飛んでくるが、かわりじてドモンは弾くことに成功する。

「ちいっ！」

『ちょっと、大丈夫！？』

「ああ、ビームは何とか殺して受けた……」

しかし、ドモン達の圧倒的不利は変わらない。

先程の攻撃でドモンは大幅にシールドエネルギーを削られてしまった。

鈴はまだ比較的余裕があるとはいっても、この調子では心もとない。ここで敵IHSはさらに観客席に銃を向ける。

いつもすればドモン達は避けられないと判断したのだろう。実際、ドモンはゴッドスラッシュで受けれることしかできず、エネルギーをどんどん削られしていく。

鈴は、拡散ビーム砲で相殺しながら青龍偃月刀で受けっていたが、あまりの威力に押され気味になる。

『もう、持たない……！』

そのときあたりの空気が一変する。

ドモンの方から明らかな殺気が沸き立つた。

あまりの殺気に鈴は身震いする。

「・・・戦いに無関係な人々を巻き込もうとするなど……」

ドモンの髪が逆立ち、激しい怒りを露にする。

「絶対に、許さん……！」

すると、背部に光の輪が発生し、機体全体が金色に輝きだした。

『どうなってるの……、これ……。』

## 第七話 発動！怒りのハイパームード 前編（後書き）

あまりにも長いので前後編に分けさせていただきました  
思つたよりも長くなつて本人が一番びっくりしています

それでは感想お待ちしています

## 第八話 発動！怒りのハイパームード 後編（前書き）

さて皆さん・・・

前回怒りに駆られハイパームードを発動した我らがドモン・カッショ  
黒いISを倒し、先に進むことはできるのでしょうか  
それとも力尽き、倒れてしまうのでしょうか  
それでは、ISファイト、レディー、ゴー！

## 第八話 発動！怒りのハイパームード 後編

「金色に輝いている・・・。」

「山田先生状況は？」

「カッシュ君のエスの出力は通常時と比べ1~2倍になっています。」

「あやつめ、ハイパームードを発動しあつたな。」

「ハイパームード？」

「うむ、あやつの感情を引き金として発動するものでのう、『ゴッドガンダムの真の力を発揮することができるのじやが・・・。』

「何か問題があるんですか？」

「あやつは今怒りにとらわれてある。言つなれば『怒りのハイパームード』よ。しかし、怒りでは真の力を発揮することはできんのじや。」

「それじゃあ、これで勝てるんですか？」

「まあ、あの程度の敵ならば問題ないじやろつて。」

「織斑先生、アリーナ内への進入口のロック解除完了しました。」

「他の先生方は？」

「まだ到着していません。」

「あちらはまだロックが解除できていないのか・・・。」

「今はなんとか一人だけで抑えられているが、今にも二人のエネルギーは尽きようとしている。」

「この状況で増援が来ないのは相当に厳しい状況である。」

「ここには専用機持ちが二人待機しているが、彼らは生徒でありできる限りは投入したくはないのだ。」

「できることなら今闘つている一人も撤退させたいが、状況がそれを許してくれない。」

「部屋の中に重い沈黙が漂う。」

「おお、そうじや。」

その沈黙を破つたのは東方不敗だつた。

「セシリア、一夏よ、お主達に頼みたい」とがあるのじや。」

「「？」

ドモンの周りにはピリピリとした空気が漂つていた。

敵EISはなぜか動きを止めていた。

まるでドモンを観察するかのように・・・。

「何を考えてるかは知らんが、来ないならいつから行くぞ!」

ブースターをふかし、敵EISに向かつて突進する。

相手は防御の構えをとる。

「てやああああ!

怒りに任せたドモンの攻撃は今までびくともしなかつた敵の装甲を打ち碎く。

「俺は貴様を絶対に許さん!」

ドモンはゴッドスラッシュを抜き正面に構える。

「俺のこの手が光つて唸る!お前を倒せと輝き叫ぶ!食らえ!愛と、怒りと、悲しみのおおおお!」

ゴッドスラッシュが巨大化し、巨大なエネルギーの塊と化す。

「シャイニングファインガアアソオオオオド!」

これがかつてドモンがシャイニングガンダムに乗つていた際の最大の必殺技「シャイニングファインガーソード」である。

怒りで増幅された威力は計り知れない。

ドモンはソードを横に構え、突進する。

「胴あおおおおおおお!」

ソードが振り抜かれ、ドモンが着地するとあれほど苦戦していた敵が胴で真つ二つにされていた。

しかし、ドモンのEISもエネルギー不足で解除されてしまった。

「はあ・・・はあ・・・、ぐつ・・・!」

体力も大幅に消耗し、膝をついてしまった。

「ドモン!」

それを見ていた鈴は着地してI.Sを解除し、ドモンに駆け寄る。

「大丈夫！？」

「ああ・・・、少し疲れただけだ。これで倒れるほど・・・軟な鍛え方はしていない。」

そういうとドモンは自分が倒したI.Sに近寄つていき、I.Sの頭部を睨む。

「大方これを通して見ているんだが、いいか、今度こんな真似をしてみる！俺は貴様を見つけ出して一度とこんな真似ができないよう叩き潰してやる！」

I.Sから返答はない。

「・・・もう機能停止したんじゃない？」

「・・・そのようだな。」

二人が決着がつき一息ついたその時、敵I.Sが一人に両腕の銃口を向ける。

「なつ！？」

（まだ動くのかこいつは！？）

いくら超人的な身体能力を持つドモンといえどビーム砲を食らってはひとたまりもない。

ましてや鈴はなおさらのことだ。

もはや避けられないと一人が覚悟したとき、横からの青い光がI.Sの腕を貫き、刃が左腕を斬り落とした。

攻撃手段を奪われたI.Sは完全に機能を停止した。

『聞一髪でしたわね。』

「ぎりぎりセーフってところだな。大丈夫か、二人とも？」

そこには管制室にいるはずのセシリアと一夏がいた。

「お前達、どうしてここに？」

『儂が向かわせたのよ。』

「『師匠！？』

『ドモン、大方お主の事じやから終わった後に黒幕に詰め寄ると思つてのう。念の為に待機させておつたのじや。』

さすがに師匠は弟子のことをよく分かっているものである。

「さて、さつさと戻るわぜ。」

「ああ。」

「さすがに疲れたものね・・・。」

「こんなのはもうこりごりですわ。」

4人が戻るとするとアリーナ内に警報が響き渡る。

『アリーナのすぐ外に大量の熱源反応が！』

『4人とも、すまんがそのまま迎撃に向かってくれ。』

『まだいるのかよ！？』

『正直もう勘弁してほしいわね・・・。』

『カツシコさんはエネルギー切れになつていますからIIS展開はで

きませんわね。』

『最悪これがあれば大丈夫だ。』

ドモンは頭に巻いた鉢巻をつかむ。

流派東方不敗を極めた人間は鉢巻さえも武器にできるのだ。

そうこうしているうちに敵が姿を現す。

『あれは・・・！？』

黄色く丸みを帯びたボディ。不気味な一つ目。握られた金棒。

（デスマーミーだと！？なぜあれがここにいるのだ・・・！？）

## 第八話 発動！怒りのハイパームード 後編（後書き）

いよいよGガンダム成分を足していきます

そういうしてるうちにPVAが五万、ユニークが一万まできました  
みなさんのおかげです

本当にありがとうございます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6517u/>

---

機動武闘伝IS

2011年10月6日20時23分発行